

ルーマニアとブルガリアにおける社会システムの
転換に伴うヒツジの移牧の変貌Changes in Sheep Transhumance in Romania and Bulgaria
since the Change of the Socialistic Regime

漆原 和子*

Kazuko URUSHIBARA-YOSHINO

Abstract: Romania and Bulgaria experienced a change in their Socialistic Regimes at the time of December 1989, and both countries become EU members together in January 2007. Changes in sheep transhumance in Romania in accordance with political and economical changes are compared with those in Bulgaria.

In Romania, sheep transhumance on the north slope of the South Carpathians was studied in 2003, 2004, 2007 and 2008. Transhumance over a great range from the South Carpathians to the Aegean Sea coastal area stopped after World War I. However, winter stations in the Banat Plain and Black Sea coastal areas still play a role. During the summer time, all sheep used to be moved up to 1,800 ~ 2,000 m a.s.l. Today, only young sheep (one year) are taken to the tops of mountains during summer.

According to interviews in 2003 and 2004, the number of sheep had increased ten times as compared with the period before the Revolution in the Chindrel Mountains. However, according to interviews in 2007 and 2008 after EU ascension, the trend was opposite. That is, after they joined the EU, they answered that the actual state was that sheep had been more numerous in these areas during the Socialistic Regime than at present. By observing changes in vegetation in the mountainous areas and by comparing soil erosion near the base villages, it is easy to surmise that the degree of land degradation during the Socialistic Regime was more serious than at present. Since the ascension to the EU in 2007, small-scale farmers, keeping less than 200 head of sheep, have gone out of business, and large-scale sheep transhumance with 1,000-2,000 head has been developing.

In Bulgaria, the number of sheep under the Socialist Regime was about five times more than at present and this may have resulted in strong stress on grasslands. The number of sheep decreased sharply after the collapse of the Socialistic Regime in 1989. As a result, bushes have invaded the green lands. Small-scale farmers holding less than 200 head of sheep in Bulgaria have been going out of business since the country joined the EU. On the other hand, new holders with 120 head of sheep are now supported by EU aid. The conclusion is therefore that Bulgaria's vision for EU support of the farmers lacks sufficient clarity.

*法政大学文学部・教授

Key words: EU加盟 (member of EU), 結晶片岩 (crystalline schist), ヒツジの垂直移牧 (ascending transhumance of sheep), ヒツジの二重移牧 (intermediate-stationed transhumance of sheep), 南カルパチア山脈 (South Carpathian Mountains), ロドピ山地 (Rodopi Mountains)

- I はじめに
 - 1) 社会主義の崩壊
 - 2) EU加盟後
 - (1) ルーマニア
 - (2) ブルガリア
- II 調査地域の概要
 - 1) ヒツジの移牧の環境
 - (1) ルーマニアのチンドレル山地における移牧の環境
 - (2) ブルガリアにおける移牧の環境
 - 2) ヒツジの移牧の変化
- III 調査結果：ルーマニアの移牧
 - 1) アブツェン山地とドナウデルタ地帯のヒツジの放牧
 - 2) チンドレル山地における移牧
 - 3) ヒツジの季節的移動
 - 4) 土地荒廃現象から推定したヒツジの密度
- IV まとめと今後の方向

I はじめに

1) 社会主義の崩壊

1989年12月16日、ルーマニアで社会主義体制に対する抗議デモの発生を発端として、12月25日にチャウシェスクの処刑によって革命は終結した。ルーマニアの社会主義体制の崩壊は、ドナウ河一つを隔てた南のブルガリアにも波及した。ブルガリアのそれは、革命の形はとらなかったものの、ほとんど同時期に社会主義体制の崩壊をみた。その後の自由経済下で、両国とも2007年1月、同時にEU加盟を果たした。

このように、政治的、経済的に大きな2度の変革を遂げた両国が、ヒツジの移牧にどのような変化をもたらしたのか、また、EU加盟後、ヒツジの移牧のたどる道はどうあるべきなのか、若干の

考察を試みた。

ルーマニアのトランシルバニア地方から、ドナウデルタの低地に向けた平地と、南カルパチア山脈の北斜面からバナート平原に至る地域は、ヒツジの移牧の中心地であり、古くから二重移牧 (intermediate-stationed transhumance) がおこなわれていた。第一次世界大戦後は、ドナウ河の下流域の河の南、すなわち、右岸側はブルガリアとなった。第二次世界大戦後のルーマニアは社会主義体制の強いコントロールのもとに、生産の国営化がおこなわれていた。次第に工業立国を目指したチャウシェスクは工業の国営化ばかりでなく、農業においても徹底した国営化をおこなった。今回の調査対象とした南カルパチア山脈の北にあるチンドレル山地は、農牧業の生産性のあがらない所として、強い社会主義体制から免れた所である。すなわち、社会主義体制の中にあっても、きわめて例外的に、土地やヒツジの個人所有が許された所である。

チンドレル山地は、長年にわたる山地から平野へのヒツジの移牧の技術を生かし、チャウシェスク体制の崩壊後もヒツジのチーズの販売、肉としてのヒツジの販売を続けてきた地域である。まさに、南カルパチア山地北斜面は白坂 (2008) のいう二重移牧の原点の地であるといってもよい。この移牧の原点としての地であるダキア (ルーマニアではダチアと呼ぶ) は、トラリアヌス帝によってローマの属州となったが、165年の後に、すなわち、A.D. 271年にアウレリアヌス帝によってゴート族に譲り渡されたのである。ローマ帝国はドナウ河の左岸に突き出したダキア属州を放棄し、代わりにドナウ河の左岸側のブルガリアの北部に、新ダキアと名づけた属州を新設した (塩野, 2008)。すなわち、ローマ帝国にとってみれば、防衛しにくい場所であった。なにゆえ南カルパチア山地北斜面では、夏に高地へヒツジの群れを追い上げ、

冬に平地でヒツジを飼う方式が取られ、維持されてきたかについては諸説あるが、ルーマニア科学アカデミー地理研究所の説明は、以下の通りである。「ローマ時代以前から、黒海からバナート平原に至るルートは侵略者たちの交通の要所であり、低地で定住することは住居や食料を奪われることを意味した。したがって、安全性という観点から、南カルパチア山脈の三段の準平原を利用し、森林の中の高地に居を構えた。準平原面上の森林を伐採して草原とし、季節とともに、ヒツジを次第に高地へと移動させる。寒い冬のみ低地にヒツジをおろす方法をとったのが始まりである」

その他に、考えられる理由は、南カルパチア山脈北斜面は、プレカンブリア時代のきわめて硬い結晶片岩からなっていて、土壌層は薄く、本格的に農業をおこなう場としては不利であり、農業的利用に適さない。この広大な地を放牧地として利用した。冬は雪の少ない、農業を終えた平地の畑で刈り取った後の作物の茎や雪から出ている草をヒツジに食べさせたというのも理由の一つであろう。

ブルガリアは、第二次バルカン戦争と第一次世界大戦前は、黒海沿岸やエーゲ海沿岸に至る地域が国土であったため、ロドピ山地とエーゲ海沿岸の標高 20 m の地域に至る二重移牧がおこなわれていた。第一次世界大戦前は、ルーマニアのトランシルバニア地方から、ロドピ山地の山麓を経てエーゲ海沿岸に至る遠距離の移牧をおこなう人々もいた。

ルーマニアとの対比のために調査地域としたのは、ブルガリアのロドピ山地の南斜面と山麓である。ブルガリアのロドピ山地とその南斜面は、現在も移牧がおこなわれており、最高海拔高度約 2,200 m である。現在では、この地域での移牧は、夏 1,600 m 前後の高地にヒツジをあげ、冬は低地におろすのみの垂直移牧 (ascending transhumance) がおこなわれている。現在では、二重移牧のうちの、高地への移動のみが残った型となった。社会主義体制下ではルーマニアと違って、ブルガリア全土で全てのヒツジの移牧が国営化されていた。高地へ移動する夏の間は、1,600 ~ 1,700 m 高地に設置された巨大な畜舎にヒツジを収容し、



写真1 社会主義時代の畜舎 ロドピ山地南麓斜面の標高約 1,400 m (2007 年 9 月 18 日筆者撮影)。

1つの集団で 50 人以上の牧童がヒツジの世話をした。集団農場時代の畜舎で、今は使用されなくなった畜舎を写真 1 に示した。牧童は給料制で、他の労働者よりはるかに高い給料で、特別な技術者としての地位が与えられていた。これを夏のキャンプといった。

ブルガリアの社会主義体制は、1989 年ルーマニアと同様に崩壊した。しかし、ルーマニアのような革命は伴わず、平和のうちに自由経済化をしていった。ブルガリアでは、国営化を解除するにあたって、社会主義体制以前の書類にもとづき、すべてのヒツジ、トラクターなどの分配をおこなった。その分配に不服な場合は裁判を起こすことができ、2007 年の調査時にも、まだ続行している裁判があるという (漆原・ペトロフ, 2008)。

2) EU 加盟後

(1) ルーマニア

ルーマニアにおいては、社会主義体制下でヒツジの放牧を国営農場化していた南東のドロジャ地方では、社会主義体制崩壊後、書類にもとづいて個人への分配をおこなった。現在では使用されなくなった巨大な畜舎 (サイバン) が残されているのみである。今回の調査地域として扱った南カルパチア山脈北麓のチンドレル山地では (図 1)、社会主義体制下での個人所有が許されていたことから、体制崩壊後もこれまでの技術を生かして生産性の向上に努めた。とりわけ、ジーナ産の移牧によるチーズは“シビウ チーズ”のブランドを市場で獲得し、品質が評判を呼び、ブカレストで

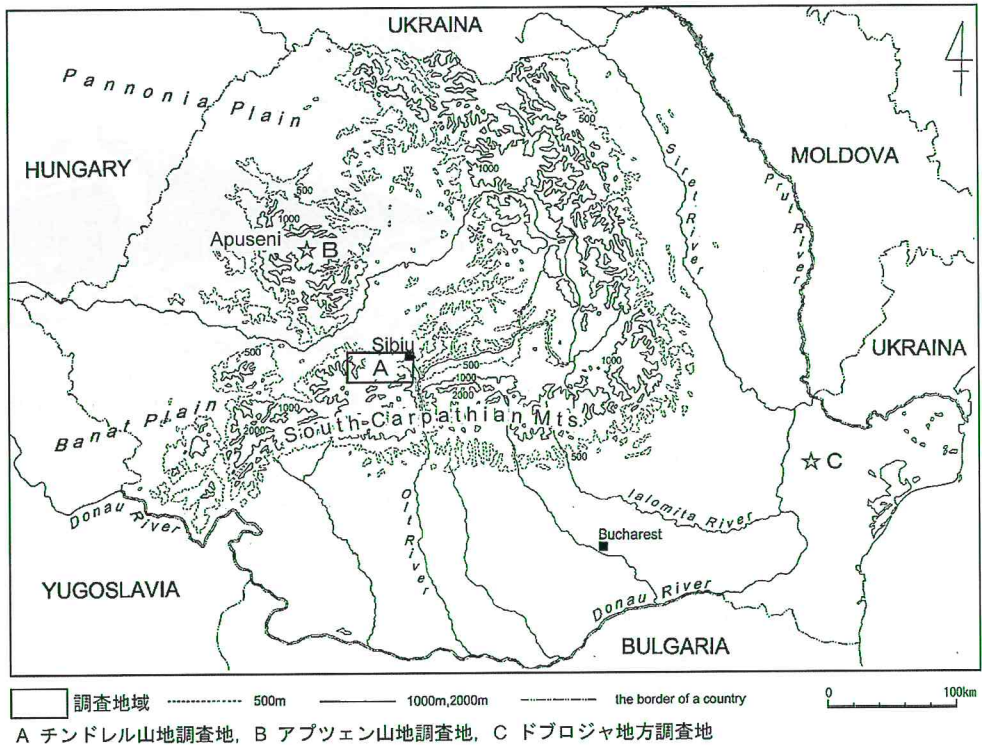


図1 ルーマニアにおける調査地域。

非常に良く売れ、一定の購買客をつかんだ。しかし、設備不足からヒツジのチーズは長距離輸送、長期間の保管はできず、国外への販路は開拓できなかった。

生活レベルの向上とともに、現金収入の方法として、チンドレル山地の山麓部の村々では、外国人向けのアグロツーリズムをおこなうようになった。こうした村々の一つシビエル (Sibiel) 村を筆者は2002年に初めて訪ねた。シビウ (Sibiu) から南西約20 kmである。その際訪ねた、約1,000 mのゴルノビタ準平原 (Gornovita peneplain) の上のジーナ (Jina) 村では、多くのロマが羊毛を乾燥していた。台地の上は一面雪が降ったように白く、小川ではロマたちが羊毛を洗い、周囲の草地の一部はゴミ捨て場と化し、著しい土壌侵食が見られた。「自由化して、住民の裁量で土地管理ができるようになったはずではないか、それなのになぜ土地荒廃が進んでいるのか」と考え、何が実際に起こっているのかを検討したいと思った。

2003年～2005年に至る調査時には、チンドレル山地の山麓の急激な変化は目を見張るものがあった。民宿しかなかったシビエルにはホテルが建ち、900～1,000 mの台地の上のジーナ村にまで大型のトラックがヒツジの毛を買い付けに来るようになり、ポヤナ シビウルイ (Poiana Sibiurui) 村の周囲には、瞬くうちにロマの住居が建ち、増加した。2003年～2005年までのジーナ村付近のヒツジの移牧の調査の結果、「1990年に自由経済化してから、2004年までにヒツジの頭数は約10倍に増加した」ということが役場のデータと、多くの人々からの聞き取り結果であった (Urushibara-Yoshino, 2006; Urushibara and Mori, 2007; Shirasaka, 2007)。2007年1月のEU加盟の条件は、これまですでに加盟しているEUメンバーの国々のヒツジの放牧と、同一基準を迫るものであった。すなわち、チーズの輸送には保冷車を用い、工場には冷蔵庫と空調を設える。ヒツジの解体は定められた場でのみおこなう。ヒツジにストレスとなる長距離の移動をさせてはならないなどである。ルー

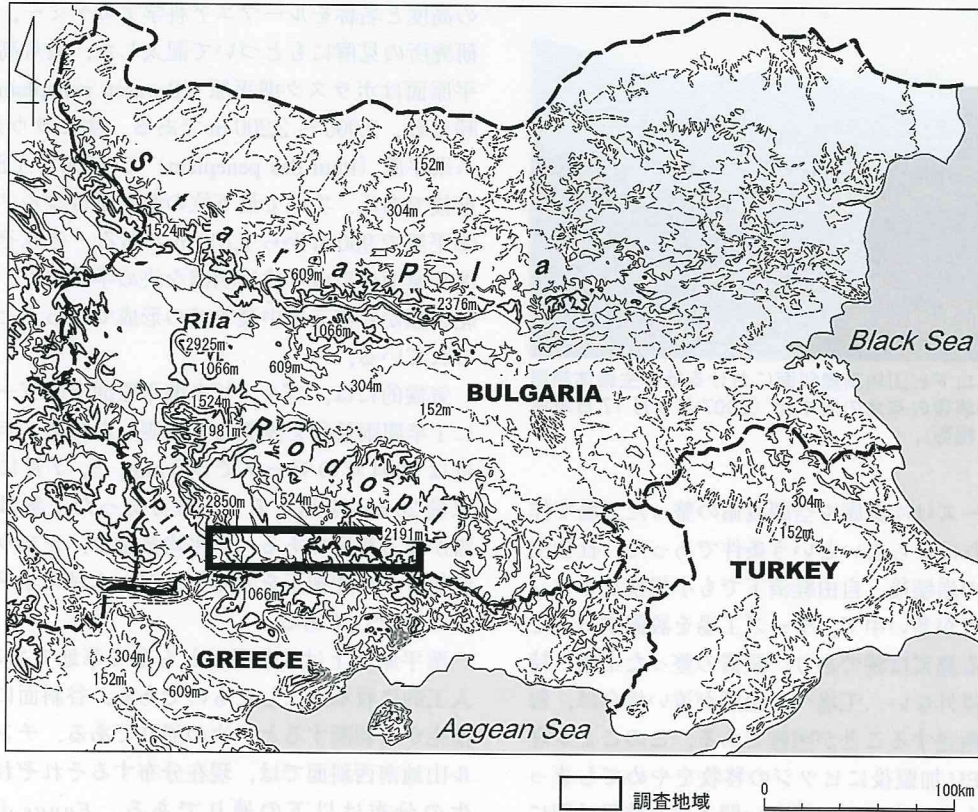


図2 ブルガリアのロドピ山地山麓部の調査地域。

マニアの牧童たちは即刻この条件をのむことは難しいと、デモンストレーションをおこなった。EU加盟直後の2007年の聞き取りでは、所有頭数、経済規模については、依然として、外向けの数字で答えるのが常であった。

EU加盟後2年経過した2008年夏から、聞き取りに対する農民の答えが変わってきた。彼等の記憶によれば、「ヒツジの頭数はむしろ社会主義体制下で最大の数に達していて、土地荒廃は1985年頃からひどくなってきた」という。上記のこれまでの聞き取りに対する答えは現実の数字ではなかった。強い社会主義体制下で、実質を明らかにしないという保身術を身につけた結果であろうか。2007年のEU加盟によって、ヒツジの実数に応じた補助金が得られることを知って、2008年はヒツジの頭数など実質で答えるようになったと思われる。そして社会主義体制下では語ることがタブーであった真実を語り始めた人々が現れた。

2008年に、初めて、聞き取りによって実状を明らかにしていくには細心の注意が必要であることがわかった。

(2) ブルガリア

ブルガリアではロドピ山脈やピリン山脈やリラ山脈においてもヒツジの移牧がおこなわれている。今回の調査地域はロドピ山脈の南麓でギリシャの国境を経てエーゲ海岸低地に至る地域を取り扱った(図2)。この地域は、ルーマニアに比較するときわめて小規模なヒツジの畜産農家が主体であり、200頭所有している農家は稀で、50頭～10頭の小規模なヒツジの所有者が多い。したがって、かつての草地も今は利用されなくなっている所が多い。写真2にはロドピ山地山麓部の草地に *Juniperus* の灌木が侵入し、森林に戻りつつある様子を示した。

ブルガリアでEU加盟によって生じた問題点



写真2 ロドピ山地南麓斜面における社会主義体制崩壊後の草地の灌木化（2007年9月17日筆者撮影）。

は、チーズは冷蔵庫や空調設備の整った工場で作らなければならないという条件であった。社会主義体制の崩壊後、自由経済下でも小規模なヒツジの所有者が多い中で、チーズ工場を設置することができる農家は稀であり、設備の整った工場へ持ち込む以外ない。工場への距離が遠い場合は、毎日乳を輸送することが困難である。このことが理由で、EU加盟後にヒツジの移牧をやめてしまった農家も多くあった。詳しい聞き取り結果は別に述べた（漆原・ベトロフ、2008）。

一方では、EUは120頭のヒツジを購入し新たに牧畜を始めようという人に助成金を出していて、その運営がうまくいっているかどうか、1か月に一度ソフィアから5～6人の査察官が検討のためやってくるという。ブルガリアのヒツジの放牧は、大規模化しようとするのか、小規模な牧畜農家を増やそうとするのか、一定の方向性がみられない。

II 調査地域の概要

2) ヒツジの移牧の環境

(1) ルーマニアのチンドレル山地における移牧の環境

南カルパチア山地は、すでにフランスのマルトンヌが、デービスの侵食輪廻説にもとづいて20世紀初頭に準平原面の存在を報告した場所である。そこはプレカンブリア時代の結晶片岩が分布する地域に相当する。図3には準平原面のおよそ

の高度と名称をルーマニア科学アカデミー、地理研究所の見解にもとづいて記入した。最も高い準平原面はボラスク準平原（Borascul penneplain）と呼ばれ、2,000～2,200 mである。次にラウルセス準平原（Raul Ses penneplain）で1,600～1,800 m前後である。次いで最下位の準平原はゴルノビタ準平原で950 mから1,100 mである。それぞれの準平原面の形成年代は明確な決め手はなく、第三紀初頭から第三紀中葉までの形成であろうと考えられている。

気候的には、ゴルノビタ準平原面上のジーナ村に1年間雨量計を設置して観測した結果、年降水量は2004年のデータで640 mm、5、7月に日降水量20 mmを越える日が3日あった。冬は若干雪が降る程度である。年平均気温は、シビウの観測値から高度補正をすると、ジーナ村の年平均気温は10.2°Cである。

準平原面上は3準平原とも全て草地であるが、人工的に牧草地にしたものである。谷斜面に残る植生から判断すると、次の通りである。チンドレル山地南西斜面では、現在分布するそれぞれの植生の分布は以下の通りである。*Fagus*（ブナ属）：およそ700～1,280 m、*Picea*（トウヒ属）：670～1,735 m、*Abies*（モミ属）：1,287～1,914 m、そして *Pinus mugo*（ムゴ松）：1,933～1,995 mに分布する。ただし、谷斜面に残る高度であり、とりわけ *Abies* と *Pinus mugo* の分布する植生帯のうち、尾根づたいは人工的に草地に変えられていて、それぞれの樹木は分布していない。図3には移牧のヒツジの移動図も記載した。基地となる母村は約1,000 mの準平原面上に位置するジーナ村である。毎年その年の天候をみながら、ジーナの村長がゴルノビタ準平原面（農民はホテルデジョス Hotel de Joş という）から、ラウルセス準平原面（農民はホテルデスス Hotel de sus という）へ移動する日を決定する。社会主義体制下では6月15日から9月1日まで最上位のボラスク準平原面へ全てのヒツジをあげた。しかし、近年では1年以下の若いヒツジであるステルペ（sterpe）に限ってこの準平原まであげる。目的は肉用のヒツジの質の向上のためである。

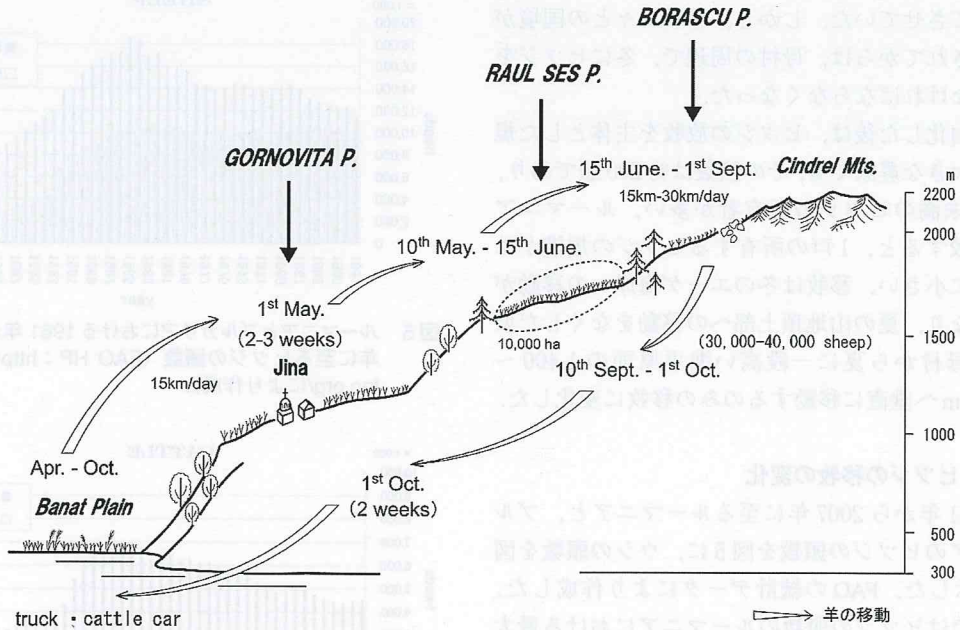


図3 バナート平原からチンドレル山地北斜面の移牧. 3 準平原と移動の季節

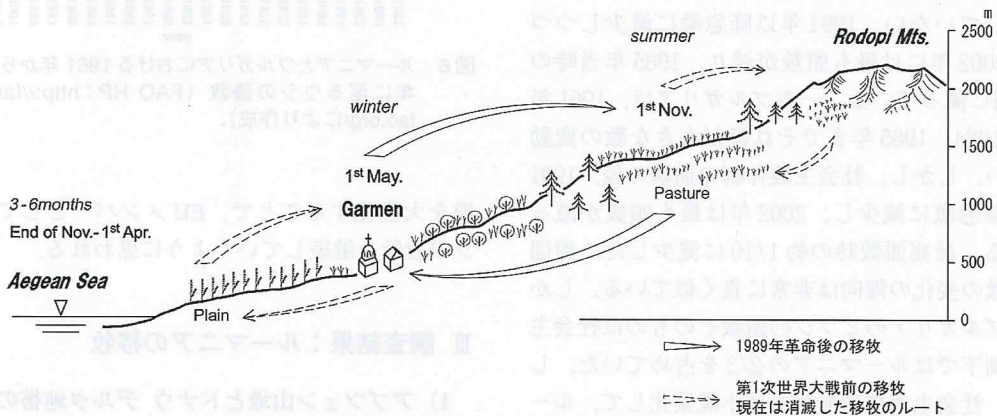


図4 ロドピ山地における移牧 1990 年以後の移牧と第一次世界大戦前の移牧.

(2) ブルガリアにおける移牧の環境

ロドピ山地の南麓におけるガルメン (Garmen) 村を中心に聞き取ったヒツジの移牧の日程を図4にモデル化して示した。ブルガリアでは牧童をカラカチャン (Karakachan) と呼ぶが、移牧を表す言葉がない。似たことを表す言葉はブルベット (Brvet) である。社会主義体制以前すなわち第二次大戦前には、最上部の山頂付近の草地までヒツジを連れてあがっていた。山頂からおろすのは、

11月初めに雪が降ったら下へ移動する。1,400～1,700 m 付近に準平原面があるが、この面は現在では垂直移牧をする際、ヒツジを夏連れてあがる上限となっている。さらに下位に500～700 mの台地が分布する。基地となる集落はほとんどがこの面に位置する。11月末から5月初めまではこの基地となる村でヒツジが放牧と畜舎で飼われる。第一次世界大戦前は、冬場は標高20 m余りの緑の草のあるエーゲ海の海岸へ移動させて、冬

を過ごさせていた。しかし、ギリシャとの国境が設定されてからは、母村の周辺で、冬にヒツジを飼わなければならなくなった。

自由化した後は、ヒツジの放牧を主体とした規模の大きな農家でも、その頭数は約200頭であり、10頭未満のヒツジの所有者が多い。ルーマニアに比較すると、1戸の所有するヒツジの規模ははるかに小さい。移牧は冬のエーゲ海岸への移動がなくなり、夏の山地頂上部への移動をなくした型で、母村から夏に一段高い準平原面の1,400～1,700mへ垂直に移動するのみの移牧に変化した。

2) ヒツジの移牧の変化

1961年から2007年に至るルーマニアと、ブルガリアのヒツジの頭数を図5に、ウシの頭数を図6に示した。FAOの統計データにより作成した。図5ではヒツジの頭数のルーマニアにおける最大は1985年であり、その後わずかに下降しているが、社会主義体制崩壊直後の1990年はそれほど減少していない。1991年以降急激に減少しつづけ、2002年には最も頭数が減り、1985年当時の1/3弱に減っている。一方ブルガリアは、1961年から1984、1985年までそれほど大きな数の変動はない。しかし、社会主義体制の崩壊の後、1991年以降急激に減少し、2002年には最も頭数が減っている。最高頭数時の約1/10に減少した。両国の頭数の変化の傾向は非常に良く似ている。しかし、ブルガリアのヒツジの頭数そのものは社会主義体制下ではルーマニアの2/3を占めていた。しかし、社会主義体制崩壊後は小規模化して、ルーマニアの頭数の約1/4に過ぎないことがわかる。

ブルガリアのヒツジの頭数は今ではきわめて少なくなり、一戸の経営規模も極めて小規模である。しかし、EU加盟後、こうした小規模経営者に補助金を出す方向にあり、新たなヒツジ農家の育成にあたっている。

ルーマニアはEUの条件を満たすべく、個人で冷蔵庫を備えたチーズ作りの工場の設備投資をおこなったり、チーズの運搬のための保冷車を購入するなど、意欲的に設備投資をする農民が現れてきた。また経営規模も1,000頭～2,000頭に拡大する農家も増えてきている。ルーマニアは経営規

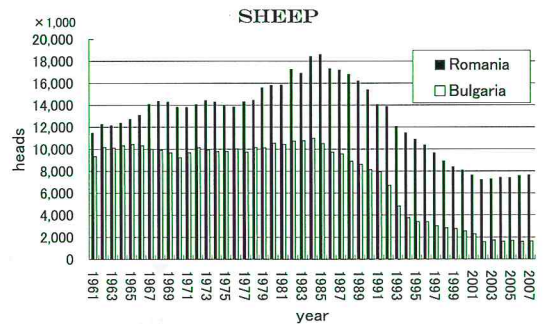


図5 ルーマニアとブルガリアにおける1961年から2007年に至るヒツジの頭数（FAO HP：<http://faostat.fao.org/>により作成）。

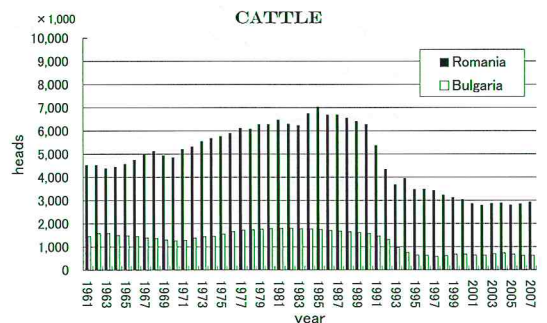


図6 ルーマニアとブルガリアにおける1961年から2007年に至るウシの頭数（FAO HP：<http://faostat.fao.org/>により作成）。

模を大型化することで、EUメンバーとしてヒツジの放牧を継続していくように思われる。

Ⅲ 調査結果：ルーマニアの移牧

1) アプツェン山地とドナウ デルタ地帯のヒツジの放牧

ドナウデルタ地帯はルーマニアの中では大規模な牧畜がおこなわれていた所である。ドナウ河の川幅が広くなり浅瀬のある場所は決まっています。Giurgeni付近であり、特にヒツジの群れの渡し場となっていた。ドナウ河畔にもヒツジや牧童にちなんだVadul Oii村（ヒツジ村）やCiobanu村（牧童村）などの地名がみられる。これらの地方は社会主義体制下では完全国営農場化していた地域である。現在では、当時の巨大な畜舎（サイバン）が放置されたままになっている場合もあり、一部が農民達によって冬利用されている場合もある。

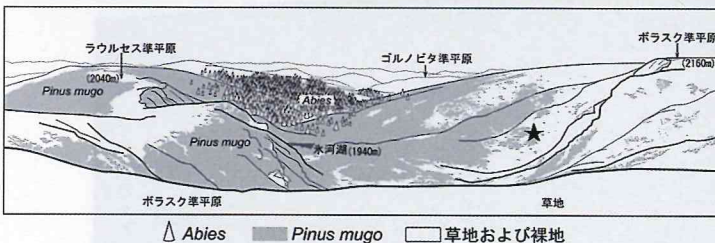
る。ドナウの低地のドブロジャ地方の広大な草原に放牧されているヒツジの密度はわずかであり、草原のポテンシャルには相当余裕があるように見受けられる（図1中のC地域）。

2007年8月アプツェン山地のヒツジの放牧地を訪れた（図1のB地域）。社会主義時代は移牧の中心地の一つであったが、ほとんどの牧草地はすでに観光地化していた。すなわち、ヒツジの放牧をやめて、別荘地として売り出し、すでにたくさんのコテージが建っていた。別荘地の購入者は、ブカレストやクルージュ、ヤポカに住む人々である。なかには廃村と化してしまっており、別荘地のみが並び、牧草地は荒地化している村もあった。約1,100 m以上の高地では牧草地の中にすでに *Abies* が侵入し、灌木林と化している地域も多くみられた。この山地では、今は移牧はほとんどおこなわれておらず、社会主義体制の崩壊とともに早いうちにヒツジの放牧をも放棄した地域である。

2) チンドレル山地における移牧

南カルパチア山地北面に位置するチンドレル山地は、最高峰をチンドレル山（Cindrel）2,244 m

とする。ほぼ東西に走る山地である。山頂部には2万年前のカルルがいくつも残る。チンドレル山の北斜面には北に向かって流下した2万年前の山岳氷河のあとがカルルとして残っている（写真3）。この山頂部からカルル底に向けて *Pinus mugo* はパッチ状に残る。*Pinus mugo* の上限より上はやわらかな草本（高山植物）が生える。現在では生まれて1年か、それ未満のステルペのみを連れここまで登る。カルルの壁面にはこうしたヒツジの作ったグレイジングテラスがみられる。早く良質の肉羊に仕立てるために、この山地最上部まで若いヒツジを連れてくるという。この最上部の準平原とカルルにも、社会主義体制時にはすべてのヒツジを連れてあがった。すなわち、当時はヒツジの頭数が多く、広大な草地の確保が必要であったことが推定できる。約1,900 mに *Pinus mugo* 帯が位置し、森林限界より上には草地が分布する。この地域の森林限界は約1,900 mであると報告されている（Buza and Fesci, 1983）。この *Pinus mugo* 帯は少なくとも南西向き斜面では、人工的にその上限を伐採して草地化した可能性がある。チンドレル山の南向き斜面の標高1,980 m付近の *Pinus mugo* を写真4に示した。この南向き斜面では、



★印の位置におけるグレイジングテラス

写真3 チンドレル山地山頂付近のカルル（ボラスク準平原）から望む北斜面のラウルセス準平原とゴルノビタ準平原（2008年7月31日筆者撮影）。

Pinus mugo 帯の下限の標高は、1,930 m 付近である。それより下部から 1,880 m 付近は *Abies* 帯となる。しかし、尾根に相当する平坦面上は草地となっていて、谷側の斜面には 1,880 m までは *Abies* の大木が残っている。したがって、かつて尾根筋は森林を伐採し、移牧のために草地を拡大したことがわかる。この 1,800 m 面から 1,600 m 面は、ラウルセス (Raul Ses) 準平原面であるとされている。1,800 m 付近から 1,915 m 付近までは現在 *Abies* の灌木と *Juniperus* が侵入している。写真5には 1,850 m 付近の草地への *Abies* の侵入を示した。写真6には 1,800 m 付近の草地への *Abies* と *Juniperus* の侵入を示した。明らかに近年はヒツジの数が減少し、草地であり続けることが

できなくなったことがわかる。この面に対するヒツジの数の変動については、聞き取りをもとに次項で考察を加える。

チンドレル山の南西斜面は、約 1,735 m から約 670 m までは *Picea* になり、標高約 1,280 m から 700 m までは *Fagus* となっている。*Picea* は植林した林が主である。それぞれの植生帯においても、尾根筋は丸みを帯びた平坦な面からなり、準平原面であるとされている。これらの下部の準平原面 (1,100 m) はゴルノビタ準平原と呼ばれているが、この尾根筋も人工的に森林を伐採し、草地とした面である。



写真4 チンドレル山地 標高 1,980 m 付近の *Pinus mugo* (2008 年 7 月 31 日筆者撮影)。



写真5 ボラスク準平原面上の草地における *Abies* と *Juniperus* の侵入。標高 1,850 m 付近 (2008 年 7 月 31 日筆者撮影)。



(a)



(b)

写真6 (a) (b) ボラスク準平原面上における *Abies* と *Juniperus* の侵入。標高 1,800 m 付近 (2008 年 7 月 31 日筆者撮影)。

3) ヒツジの季節的移動

チンドレル山地の準平原面と、現在のおよそのヒツジの移牧の時期のモデルを図4に示した。移動のルートと時期は、社会主義時代も1990年以降も変わっていない。しかし、2008年の牧童や、ヒツジの所有者たちへの聞き取りの結果、明らかになってきたことは、最上部の準平原面である1,800 m 前後から頂上の2,200 m までヒツジを連れていくのは今日では1歳以下のステルペのみに限られていることである。チンドレル山地の山頂部では、2008年8月に4グループのみ滞在している。ヒツジの頭数では4,000頭弱と思われる。また社会主義時代、ヒツジの自由な所有が許されていた時は、ほとんど全てのヒツジを最上部の準平原面まで連れてきていたという。少なくとも40,000頭を越えていたことが推定できる。ヒツジばかりではなく、ウシも共にここで夏を過ごし、共同利用の畜舎までであった。しかし、現在畜舎はすでに放置されて久しい姿である(写真7)。社会主義時代に最上部の準平原にヒツジを連れていっていたというジーナ村の人と、ジーナ村からバナート平原へ移動して、そこですでに定住している人々に、2008年8月初めてチンドレル山地の山頂部にすべてのヒツジを連れて行っていたこと、社会主義体制下の方がヒツジの数が多かったことを聞くことができた。先の報告書(漆原, 2006)には、聞き取りとジーナの村役場の統計データから「自由経済のもとで2004年当時、1 ha あたりおよそ4頭のヒツジがいて、合計40,000



写真7 チンドレル山地(1,700 m 付近)のラウルセス準平原面上の現在は放置されているサイバン(畜舎)(2008年7月31日筆者撮影)。

頭いる。社会主義時代よりもヒツジの頭数が多くなっている」との結果を記述している。

しかし、2007年にはジーナ村で乳しぼりをしているヒツジの実頭数を我々が数え始めたら、突然ヒツジの持ち主が怒り始めた。ヒツジの頭数はヒツジの持ち主のいう数より約2割多かった。2008年夏の聞き取りは、EU加盟から2年を経過した年である。ヒツジ農家やヒツジの放牧に関わる人々のヒツジの頭数の答えが変わった。上記のように、実は社会主義時代の方が今よりもヒツジの頭数が多かったという声が初めて聞かれるようになった。

この質問に対する答え方の変化を筆者は次のように考えた。EU加盟1年目には農民達は少なめに申告したが、その頭数に応じて補助金がきちんと支払われることがわかってきた。しかし2年目

には、農民たちが実数を申告すると、それに応じて補助金が支払われるので、頭数を少なく申告する必要がないことがわかった。社会主義体制の強化とともに、農民はヒツジの頭数や経営状態は本当の事は言わない、という自己防衛を身につけていたものと思われる。役場の統計データは社会主義時代も自由経済に突入してから実態を表していないと思われる。

4) 土地荒廃現象から推定したヒツジの密度

チンドレル山地のヒツジの密度の変化を土地荒廃の程度から推定しようと試みたが、社会主義体制下の実態が残されていないので、きわめて難しい。

まず初めに、チンドレル山地北麓の最下部の準平原約900～1,000mの上にある基地のジーナ村

とポヤナシビウレイ村の2村の境界付近で最も劣悪な土壤侵食を起こしている地点を、2003年、2004年、そして2008年の状態を写真で比較したい(写真8a,b,c)。2003年8月、2004年8月当時はロマの住居は増加を続け、崖地の土壤侵食は拡大を続けている。また、2003年はロマの住宅のそばは広大なゴミ捨て場となっていて、この年はヒツジを上準平原面に連れて行かず、この草地に留まってヒツジを放牧している牧童は少なくとも1人はいた。しかし、2008年8月はロマの村の人口はあきらかに減少しており、ロマの子供の数も、野外で仕事をしている人々の数も少なく、ヒツジの毛も台地の上で干してはいなかった。8月でもこの草地に留まってヒツジを放牧している牧童は少なくとも1人はいた。

3枚の写真を比較してわかることは、この土壤



(a) (2003年8月29日筆者撮影)



(b) (2004年9月7日羽田麻美撮影)



(c) (2008年7月28日筆者撮影)

写真8 ポヤナシビウレイ村(950 m a.s.l.)の村はずれにおける土壤侵食とロマの集落。

侵食を起こした斜面に2008年はわずかに緑が戻っていることである。しかし、グレイジングテラスは存在するので、ヒツジの侵入はあるが、ストレスは減少したとみることができる。2002年以來の筆者の観察では、最もロマの数が多く、ひどい土地荒廃に驚いたのは2002年であり、次いで2003年、2004年である。このことからすると、この草地を利用するヒツジの数は減少してきていると判断せざるを得ない。社会主義体制下から今日までこの地域の観察を続けている科学アカデミー地理研究所・研究員ダヌート カリン (Danut Calin) は、この地域は社会主義体制下の1985年頃から目だって土地荒廃がひどくなってきたと語っている。したがって社会主義体制下で最も土地荒廃が進んでいて、むしろ2007年、2008年は回復しつつあるのではないかと推定する。

IV まとめと今後の方向

ルーマニアとブルガリアにおいて社会主義体制の崩壊後のヒツジの移牧の変化と、EU加盟後の両国のヒツジの移牧について次のようにまとめた。

ルーマニア

- i) ルーマニア全土においては社会主義体制下のヒツジの頭数の最大は1985年であった。体制の崩壊ののち、2年後からヒツジの頭数は激減して、2002年には最低となり4分の3になった。
- ii) チンドレル山地の社会主義体制下でヒツジの個人所有が許されていたジーナ村を中心とする二重移牧の地では、社会主義体制下でヒツジの頭数は最大に達し、土地荒廃も進んでいたと思われる。体制の崩壊後は移牧の形式が変化し、1,800 m以上の高地へは全頭を移動せず、若いヒツジのステルベのみを連れていくようになった。このため長年にわたって森林伐採して草地化してきた準平原面上に *Abies* が進入し、*Pinus mugo* が回復しつつある。
- iii) EU加盟後は、設備投資をし、個人でチーズ工場の整備をし、1,000頭のヒツジを所有する農民が多くなりつつある。

iv) 冬の放牧地であったバナート平原で夏も定住する人々が増え、最上部の移牧地は限られた若いヒツジのみ連れていくようになり、次第に二重移牧の形が崩れつつある。

v) EU加盟後、経済性重視をすると、二重移牧の形式は消滅すると思われる。二重移牧を技術面、景観面から考えるなら二重移牧の保護政策をとらなければならないと考える。

ブルガリア

- i) ブルガリア全土では社会主義体制下のヒツジの頭数の最大は1985年であった。ルーマニアと同様に体制の崩壊ののち、2年後からヒツジの頭数は激減して、2002年には最低の頭数となり、1985年の5分の1になった。
- ii) ヒツジの移牧は社会主義体制前からすでに二重移牧の形を失っており、垂直移牧のみであった。しかし、社会主義体制下では1,700 mより上の2,000 mまでヒツジを追いあげていたが、体制の崩壊後は個人所有の頭数は減り、小型化し、1,700 mまでしかヒツジを追いあげなくなった。
- iii) EU加盟後の変化は、200頭以上の農家がチーズ工場へ距離が遠くて乳を持ち込めないのをやめた。という一方で約100頭余りのヒツジの所有者に補助金を出す政策を取っていて、補助金の使われ方に一貫性がない。
- iv) 今後の方向として、肉羊とチーズ、ヨーグルト用のヒツジの飼育に対して、補助金の用途の効率をはかった牧畜を考える必要がある。牧草地としてのポテンシャルは十分あるので、放牧を生かした農業の方策を探る必要があると思われる。

謝 辞

白坂蕃先生の退官記念号に執筆し、先生の退官をお祝いできることは非常に喜びであります。また、これは先生とは同年生まれで、1980年代の雲南の海外調査には共に分担者として参加し、そして2004年からのルーマニアの海外調査では、「ケーキでつられた」と白坂先生はしきりに嘆くが、共に研究をさせていただき、大いに刺激され

たことに感謝申し上げます。白坂先生が実にのびのびと海外で種々の研究をしておられました。立教大学観光学部において、研究のための環境がとて心地良いものであったためだろうと推察いたします。

この研究報告は2003年～2005年度の科学研究補助金、海外学術調査基盤研究(B)(2)課題番号15401032 代表者吉野(漆原)和子「社会構造の変化に伴う過放牧に起因する地生態の変化」と、2007年～2009年度の科学研究費補助金、海外学術調査基盤研究(B)(2)課題番号19401003 代表者吉野(漆原)和子「社会主義の変化に伴う移牧の変貌と土地荒廃」を使用した。ルーマニアの現地調査にはルーマニア科学アカデミー地理研究所所長 Prof. Dr. Balteanu Dan, 研究員 Dr. Micu Mihai, Dr. Grigorescu Ines と Mr. Danut Calin の多大な協力をいただいた。またブルガリアでの現地調査では、ブルガリア科学アカデミー地理研究所の研究員 Dr. Petrov Peter の献身的な協力があつた事を記して感謝申し上げる。

文 献

- Buza, M. and Fesci, S. (1983): *Munşii Noştri*. Sport. Turism, 135 p.
- 塩野七生 (2008): 『ローマ人の物語 34 一 迷走する帝国 (下) 一』. 新潮社, 216 P.
- Shirasaka, S. (2007): The Transhumance of Sheep in the Southern Carpathians Mts., Romania. *Geographical Review of Japan*, 80, 94-115.
- 白坂 蕃 (2008): ルーマニア, トランシルバニア山地におけるヒツジの移牧. 立教大学観光学部紀要, 10, 7-38.
- 漆原和子 (2006): 南カルパチア山脈における羊の移牧による土地荒廃. 法政大学文学部紀要, 52, 33-46.
- Urushibara-Yoshino, K. (2006): *Changing Social Conditions and their Impacts on the Geoecology-Transhumance Regions of Romania and Slovenia*, Department of Geography, Hosei University, 213 p.
- Urushibara-Yoshino, K. and Mori, K. (2007): Degradation of Geocological and Hydrological Conditions due to Grazing in South Carpathian Mountains under the Influence of Changing Social Structure in Romania. *Geographical Review of Japan*, 80, 76-93.
- 漆原和子・ピーター, ベトロフ (2008): ブルガリアにおける EU 加盟後の羊の移牧の変貌. 法政大学文学部紀要, 57, 57-67.